

村上春樹短編小説「レーダーホーゼン」における<レーダーホーゼン>と<半ズボン>

関 氷氷 楊 炳菁

On “Lederhosen” and “Short Trouser” in Haruki Murakami's Short Story “Lederhosen”

Guan Bingbing Yang Bingjing

Abstract

Many previous studies have interpreted the reasons for the mother's divorce in terms of the symbolic meaning of the “lederhosen”, which ultimately leads to the conclusion that “Lederhosen” is a story of a mother's independence. But this is not what the novel mapped. The words “lederhosen” and “short trouser” are two key words frequently used in the novel. If we examine the principles of dressmaking in the century-old shop and the mother's shopping process, we will find that “lederhosen” represents singularity. The mother was previously unconscious of singularity and had always dealt with it in terms of particularity. However, during the shopping process she became aware of the problem of singularity, which led to the mother's divorce.

1 はじめに

村上春樹の短編小説「レーダーホーゼン」は短編集『回転木馬のデッド・ヒート』（1985年）に書き下ろされた作品である。この短編は「僕」の回想によって構成されており、その内容は妻の友人である「彼女」が語る両親の離婚話である。「彼女」は母親が<レーダーホーゼン（半ズボン）>¹をきっかけに父親と離婚したのだと「僕」に打ち明ける。<レーダーホーゼン>とは「上に吊り紐がついたやつ」（254頁）²で、「ドイツ人がよくはいている半ズボンのこと」（254頁）である。

離婚を決意した理由があまりにも不可解なものであり、また日本人の日常生活においてはドイツの民族衣装である<レーダーホーゼン>は馴染みがないためか、<レーダーホーゼン>のもつ象徴性から作品にアプローチする研究者は少なくない。例えば、酒井英行氏は自身の著書『村上春樹 分身との戯れ』の中で、<レーダーホーゼン>を売る洋品店の方針は、母親が55年間守ってきた社会規範の象徴だと論じており、彼女が「細かい調整」をすることによって、夫、娘、

¹ 本稿では、母親がお土産として買おうとするその服を<レーダーホーゼン（半ズボン）>と表記する。

² 本稿は『村上春樹全作品 1979～1989⑤短編集Ⅱ』（講談社 1991）に収録されたバージョンをテキストとし、小説からの引用はページ数だけを示す。

そして世間という「お客様」の「体型」(期待、価値観)におのれを合わせてきたのである」³と指摘する。氏は、したがって「ドイツのレーダーホーゼンを売る店で、母親が見ていたものは、彼女自身(の姿)であったのだと言うべきであろう」⁴と結論した。酒井氏の「レーダーホーゼン」論に触発された加藤典洋氏は学生のレポートを参照した上で、本作における「レーダーホーゼン」は女性の性器の象徴だと主張し、以下のように述べた。「レーダーホーゼンは男性の下半身を覆う。母親はそれが男性によって着用されるのを見たとき、自分と夫の性的関係を目のあたりにする気持ちをもっただろう」⁵と。また、父親と同じ体型のドイツ人男性が、新しい「レーダーホーゼン」を試着する時に大喜びしたところから、「レーダーホーゼン」は母親の性器を象徴しているだけでなく、父親の愛人も示唆している。つまり、「若い恋人を自分の流儀と方針に「合わせ」ること、調節させることが、喜びの根源なのだ」⁶とした。要するに、「レーダーホーゼン」を売る店で「レーダーホーゼン」を調節することは、男性に対する女性の性的従順さを意味しているのだというのが加藤氏の主張である。加藤氏の結論は酒井氏の結論を下敷きにしたため、両者の分析には類似性がある。つまり、両氏はともに「レーダーホーゼン」を母親か母親の一部だと見なしているのである。ただ、酒井氏は社会規範の観点から「レーダーホーゼン」の調整は母親が社会的役割に適応し続けることだと主張する一方、加藤氏はジェンダーの観点から性的関係における女性の男性への従属化だと捉えている。そして、短編「レーダーホーゼン」の物語を、母親が「レーダーホーゼン(半ズボン)」をきっかけに父親と離婚した話だと認める点も両氏に共通しているところである。要するに、両氏の研究の前提は同じなのである。

短編「レーダーホーゼン」を、ドイツに旅行した母親が「レーダーホーゼン(半ズボン)」をきっかけに離婚を決意した物語だと見なしたのは、酒井氏と加藤氏だけではない。この短編を離婚をめぐる話だと捉えるのは、むしろ大多数の研究者が「レーダーホーゼン」を分析する時の大前提と言ってよい。実際、「母が父親を捨てたのよ……半ズボンのことが原因でね」(253頁)という「彼女」のはっきりした告白があるため、母親の離婚は「レーダーホーゼン(半ズボン)」が原因だと捉えること自体に問題はなく、物語の筋に合っているとさえ言える。だが、もしそうであれば、二つの問題が生じる。第一に、酒井氏と加藤氏の結論からすれば、社会規範の象徴であるにせよ、性器の象徴であるにせよ、「レーダーホーゼン(半ズボン)」はいずれも父親との結婚生活における母親のあり方を象徴していることになる。そこで、母親の離婚は、必然的に、それまでの夫中心の生活から脱却し、自立を遂げようとする一人の女性の目覚め、いわば「自己の覚醒」を表現するものということになる。しかし、小説の最後に「僕」と「彼女」は以下のような対話をしている。

³ 酒井英行(2001)『村上春樹 分身との戯れ』翰林書房 93頁

⁴ 酒井英行(2001)『村上春樹 分身との戯れ』翰林書房 94頁

⁵ 加藤典洋(2011)『村上春樹の短編を英語で読む 1979～2011』講談社 377頁

⁶ 加藤典洋(2011)『村上春樹の短編を英語で読む 1979～2011』講談社 378頁

「それでもし——もし、さっきの話から半ズボンの部分を抜きにして、一人の女性が旅先で自立を獲得するというだけの話だったとしたら、君はお母さんが君を捨てたことを許せただろうか？」

「駄目ね」と彼女は即座に答えた。「この話のポイントは半ズボンにあるのよ」(263頁)

二人の対話からわかるように、「僕」にしても「彼女」にしても、母親の離婚を一人の女性の目覚めとして捉えてはいない。したがって、酒井氏と加藤氏は<レーダーホーゼン>を解説のポイントとして本作を分析しているが、その結論は作品の真意と合致してはいないと言えよう。そして第二に、上記の対話においては「この話のポイントはレーダーホーゼンにある」とは述べられておらず、代わりに<半ズボン>という単語が使われているという点は看過できない。呼称の違いによって次のような疑問——作品に使用された<レーダーホーゼン>と<半ズボン>という言葉は果たして区別されているのか——がもたらされたとしたら、この点はさらに重要だと思われる。二つの表現がもし簡単に置き換えられることができるのであれば、<レーダーホーゼン>だけを集中的に分析すればよいのだが、もし両者が区別して使われており、簡単に置き換えることができないのであれば、<レーダーホーゼン>の象徴性を分析するだけでは小説の意図を把握するには不十分だと思われる。つまり、<レーダーホーゼン>と<半ズボン>の区別を明らかにし、両者のそれぞれの意味を解明することが必要なのである。これによって、なぜ「この話のポイントは半ズボンにあるのよ」という一文で<半ズボン>という単語が使用されているのかの理由がわかると同時に、本作の真意も把握できるだろう。

2 小説における<レーダーホーゼン>と<半ズボン>の使い分け

<レーダーホーゼン>という単語は、この短編のタイトルであることからわかるように、重要なものである。一方、<半ズボン>という単語は、小説の締めくくりにある台詞「この話のポイントは半ズボンにあるのよ」(263頁)の中に登場したものであり、その重要性は決して看過できない。「レーダーホーゼン」という短編には二つの呼称が繰り返し使われているが、その使い分けに関する論考は、管見の限り存在しない。ただ、駒ヶ嶺泰暁氏は「「レーダーホーゼン」論——「レーダーホーゼン」が「半ズボン」になったことが、「僕」によって語られる物語」という論文で、次のように論じたことがある。

<半ズボン>は、それぞれの登場人物達にとって、馴染みの薄いレーダーホーゼンとして認識されるところから始まりながら、やがて<半ズボン>として多少の揶揄を含んだユーモアを帯びた<半ズボン>という概念に捉え返されることで、母親はもちろん、特に「彼女」にとってはきわめておおきな意味を持つ「事実(マテリアル)」となっていく。⁷

⁷ 駒ヶ嶺泰暁(2008)「「レーダーホーゼン」論——「レーダーホーゼン」が「半ズボン」になったことが、

しかしながら、ここで駒ヶ嶺氏は<レーダーホーゼン>と<半ズボン>の違いというよりは、小説における<半ズボン>という言葉の役割自体を論じている。ただ、その論述における「馴染みの薄いレーダーホーゼン」や「<半ズボン>という概念」などといった表現から見れば、氏の考えは以下のようなものであると考えられる。<レーダーホーゼン>と<半ズボン>という呼称には若干の区別が存在しており、前者は具体的な事物を表すのに対して、後者は一つの概念を示している。そして、短編「レーダーホーゼン」では、<レーダーホーゼン>に具体的な事物としての馴染みが薄いことから、<半ズボン>という言葉が使用され、それが概念化したというわけである。言い換えれば、<レーダーホーゼン>と<半ズボン>は異なった呼称であるが、同じ物の異なった表現に過ぎないということである。

<レーダーホーゼン>と<半ズボン>が同様のものを指しているという判断は、少なくとも小説の冒頭部の描写から言えば、適切だと言えよう。なぜなら、「彼女」は「僕」に「母が父親を捨てたのよ」(253 頁)、「半ズボンのことが原因でね」(253 頁)と言った後、「正確にはレーダーホーゼン。レーダーホーゼンって知ってる？」(254 頁)と続けているからである。「彼女」が使った<レーダーホーゼン>という言葉は、タイトル以外では、はじめての<レーダーホーゼン>という単語の使用例である。また、「僕」に対する「彼女」の説明を考慮すれば、<レーダーホーゼン>と<半ズボン>は同じものの異なった呼称だと理解してよかろう。つまり、ドイツの民族衣装である<レーダーホーゼン>はあまり知られていないため、彼女はまず、<半ズボン>という言葉でその基本的な形を「僕」に伝え、さらに正確な名である<レーダーホーゼン>という名称を「僕」に教えた。つまり、異なった呼称の使用は、よりよく「僕」に理解させようとするためのものだったのだ。だが、興味深いことに、上記の目的が達成された後でも、<半ズボン>という単語は依然として使われており、本作に 11 回も登場するのである。<半ズボン>という単語が頻出することは、両者の関係性が上記の対話におけるような単純なものでないことを示唆している。

実際には、たとえ作品を詳しく分析しなくても、<レーダーホーゼン>と<半ズボン>の違いは明白である。「彼女」が<半ズボン>という言葉を使って母親の離婚について話し出したとき、「僕」は話をまったく理解できず、「半ズボン？」(253 頁)と聞き返した。そこで、彼女は代わりに<レーダーホーゼン>という言葉を使って説明するのだが、この時点で初めて、「僕」は彼女の認識と一致したのだった。つまり、彼女にとって<レーダーホーゼン>と<半ズボン>は同じものなのだが、それに対して、「僕」は彼女の追加説明がない時点では、両者を同様のものとは捉えていなかったのである。

「僕」の反応は<レーダーホーゼン>と<半ズボン>との関係性を端的に示している。実際には、<レーダーホーゼン>と<半ズボン>は同次元に属するものではなく、特殊性と一般性という点で互いに関連している。つまり、長ズボンに対して、丈が短いズボンはすべて<半ズボン>と

呼ぶことができるように、<半ズボン>とは一つの概念であり、集合でもある。一方、<レーダーホーゼン>はその集合における特別なグループで、ドイツの民族衣装として世間に知られている。両者は以上の関係にあるからこそ、彼女が<レーダーホーゼン>という正式名を口にした後、「僕」は具体的なイメージを形成し、彼女の両親の身の上になにが起きたかも理解したのだ。したがって、<レーダーホーゼン（半ズボン）>を購入した母親が離婚を決意した物語である本作が、<レーダーホーゼン>という単語をタイトルに冠することには何の違和感もなく、自然な成り行きと言ってよいのだが、それに対して「この話のポイントは半ズボンにあるのよ」（263 頁）という結びのところに使われた<半ズボン>という単語は不自然と言わざるをえない。というのも、母親が買ったのはドイツの民族衣装の<レーダーホーゼン>だったのに、丈が短いズボンを表す一般的な名称としての<半ズボン>という言葉が使われているからだ。

<レーダーホーゼン>と<半ズボン>の使い分けについては、母親の言葉を考察するのがおそらく一番効果的だと思われる。本作のキーパーソンは、<レーダーホーゼン（半ズボン）>を買うことで離婚を決意した母親であることは間違いないからだ。勿論、母親の出番は少なく、娘である「彼女」によって語られる構造をもつ本作においては、「僕」が物語を再構築⁸している点も看過できない。しかし、それであっても、母親の<レーダーホーゼン>と<半ズボン>という言葉の使い分けには重要な意味が隠されているに違いない。

ドイツ旅行時：

- 1、彼女が「自分は今これからみやげのレーダーホーゼンを買いに行くところだ」と言うと、……（258 頁）
- 2、レーダーホーゼンを買いに来たのだ、と彼女が言うと、……（258 頁）
- 3、「レーダーホーゼンを買いたいのです」彼女は英語で言った。（259 頁）
- 4、「わたしはお宅でズボンを買うために、半日つぶしてわざわざハンブルクからやってきたんですよ」（260 頁）
- 5、「私が主人にそっくりの体型の人をみつけてここに連れてくるの。そしてその人に半ズボンをはいてもらい、あなた方がそれを調整し、私に売るの」（260 頁）
- 6、「あなた方はその人にレーダーホーゼンを売り、私がその人からそれを買う。……だからもし今レーダーホーゼンを買う機会がなければ、私は永遠にそれを手に入れることはできないのよ」（261 頁）

離婚三年後、娘との再会時：

- 7、「私自身にさえものごとの進み具合がよく把握できないのよ」と母親は言った「でもそ

⁸ 「レーダーホーゼン」の構造、および「僕」の語りからの解釈は拙稿「「レーダーホーゼン」における「絶対的真実のようなもの」（『淡江外語論叢』No.34 153-169 頁）と「リアリズムの破壊と蘇生の試み——「レーダーホーゼン」と「タクシーに乗った男」における村上春樹の「ツイスト」——」（『早稲田大学国際文学館ジャーナル』第1号 13-22 頁）に詳しい。

もそもはあの半ズボンが原因だったの」(257 頁、下線筆者)

<レーダーホーゼン>と<半ズボン>に言及する母親の言葉を抜き出し、時系列に沿って並べた。読者は以下の二点に注目すべきであろう。

一つ目は、7の母親の台詞である。娘との再会時における母親の言葉は一つしかないものの、ここには離婚から三年が経った時点での本人による離婚原因への見解が示されており、これはきわめて重要なものである。「ものごとの進み具合がよく把握できない」(257 頁)という断りが入れてはあるが、その原因を母親自身が<レーダーホーゼン>ではなく<半ズボン>に帰結したところに注目したい。これは小説の結びに登場する娘の「この話のポイントは半ズボンにあるのよ」(263)という表現と一致しており、偶然の使用とは考えにくい。

第二に、母親の言葉には、<レーダーホーゼン>という単語も<半ズボン>という単語も現れるが、6を除けば、一定のルールに従って使用されていることは重要である。最初の1~3は<レーダーホーゼン>という単語が使われているが、4で<ズボン>、それ以降は<半ズボン>という単語が使われている。摘出した7つの台詞は時系列に沿っているので、もし<レーダーホーゼン>という単語と<半ズボン>という単語が異なった意味で使われていたとすると、3と4の間に何かが起こったはずで、それによって母親の使用に変化がもたらされたのではないかと推測できる。そして、<レーダーホーゼン>という単語が6で再び登場するが、それは母親がある特別な状態にあるため使われたのではないかと思われる。

母親の<レーダーホーゼン>と<半ズボン>の使い分けについて、以上のように考察したが、果たして本作は上記の推測を裏付けているのだろうか。

3 <レーダーホーゼン>と<半ズボン>の性質

小説を読めばわかるように、時系列順に並べた1と2は母親が店に辿り着く前の台詞で、3は店に入って二人の老人に自分の意図を説明するときに使われた台詞である。そして4は、店の老人と言葉を交わす時に使った台詞であるが、この時、3とは異なった呼称を使っていることから、その対話全体を考察することは重要だろう。

「何か御用でしょうか、奥様」と大柄の方の老人が立ち上がってドイツ語で声をかけた。

「3レーダーホーゼンを買いたいのです」と彼女は英語で言った。

「奥様がおはきになるのですか？」と老人がくせのある英語で訊ねた。

「いいえ、そうじゃありません。日本にいる夫のみやげに買って帰るんです」

「うむ」と老人は言って、しばらく考え込んだ。「とすると、御主人は今ここにいらっしゃらないわけですか」

「そうです、もちろん。だって日本にいるんですから」と彼女は答えた。

「とすると、そこにひとつの問題が生じます」と老人は丁寧に言葉を選びながら言った。
「つまり我々は存在しないお客様には品物を売ることはできませんのです」
「主人は存在します」と彼女は言った。
「それはそうです。御主人は存在していらっしゃる。もちろんです」老人は慌てて言った。
「英語が上手くしゃべれんので申しわけないです。私の言わんとすることは、うむ、御主人がここにおられないのであれば、御主人のためのレーダーホーゼンをお売りにすることはできんということです」
「どうして」彼女は混乱した頭で訊ねた。
「店の方針なんです。方針。我々はおみえになったお客様に体型にあったレーダーホーゼンを実際にはいていただき、細かい調整をし、その上ではじめてお売りするのです。百年以上のあいだ、我々はそのようにして商売をしております。そのような方針の故に我々は信用を築いて参ったのです」
「4 私はお家でズボンを買うために、半日つぶしてわざわざハンブルクからやってきたんですよ」(259-260 頁、下線筆者)

以上は 3 と 4 に挟まれた母親と店の老人との対話である。前述のように、<半ズボン>と<レーダーホーゼン>は一般性と特殊性という点で互いに関連している。つまり<半ズボン>は丈の短いズボンの集合を指すのに対して、<レーダーホーゼン>はその集合における特殊なグループである。しかし、レーダーホーゼンを売る店の方針を考慮すれば、<半ズボン>と<レーダーホーゼン>の関係は決して一般性と特殊性という違いでまとめられるものではない。確かに「ドイツ人がよくはいている半ズボン」(254 頁)や、「上に吊り紐がついたやつ」(254 頁)などの表現から、<半ズボン>と<レーダーホーゼン>は一般性と特殊性の関係にあるように見えるが、<レーダーホーゼン>を<カジュアル・パンツ>といった別の種類の言葉で置き換えてみれば、その違いが明らかになる。

まず生産過程から言えば、商品として売られる<カジュアル・パンツ>は量産されたものである。それに対して、この店の奥は「広い作業場になっているらしく」(259 頁)、二人の老人は「布地の寸法をとったり、ノートに何かを書き付けていたり」(259 頁)して働いている。つまり、老舗洋品店が売る<レーダーホーゼン>は量産品ではなく、手作り品なのである。だが、

<カジュアル・パンツ>と<レーダーホーゼン>の決定的な違いはその生産過程にあるのではなく、販売過程、言い換えれば、店が守ってきた方針にこそある。

<カジュアル・パンツ>と言えば、普通ショッピングモールなどの洋品店で売られており、お金さえ払えば手に入れられるものである。つまり、量産された<カジュアル・パンツ>は客が買う前から存在し、誰に買われるかがわからない段階で売りに置かれている。そして<カジュアル・パンツ>はお金さえ払えば誰でも買える。自分の為だけでなく、他人の為に買うこともでき、さらには元々自分の為に買ったものを後ほど他人に譲渡することも可能であり、購入の目的は制

限されていない。要するに、＜カジュアル・パンツ＞は一般的な需要をターゲットに量産されたもので、特定の個人に限って提供されるものではない。一方、百年の歴史をもつ老舗洋品店の販売方針によれば、着用者が現場にいることが販売の大前提で、「おみえになったお客様に体型にあったレーダーホーゼンを実際にはいていただき、細かい調整をし、その上ではじめてお売りするの」(260 頁)である。これを言い換えれば、＜レーダーホーゼン＞はその場で履く人がいるからこそ生まれるものであり、老舗洋品店の販売方針のもとでは、ある＜レーダーホーゼン＞は特定の誰かの＜レーダーホーゼン＞に繋がっているわけである。こういう方針のもとで見れば、＜レーダーホーゼン＞という言葉は、＜カジュアル・パンツ＞とは違って集合的なものを表すのではない。各々の＜レーダーホーゼン＞は特定の誰かの＜レーダーホーゼン＞でなくてはならないからだ。

＜カジュアル・パンツ＞と＜レーダーホーゼン＞の比較からわかるように、ズボンの一種としての＜カジュアル・パンツ＞はズボンとは特殊性と一般性の関係にあるが、それに対して、＜レーダーホーゼン＞と＜半ズボン＞はそれと同様の関係にあるとはいいがたい。確かに＜レーダーホーゼン＞は丈の短いズボンのことで、＜半ズボン＞とは特殊性と一般性の関係にあるように見えるが、老舗洋品店には特定の誰かの＜レーダーホーゼン＞しか存在し得ないため、いわゆる特殊性と一般性の関係は、実際的なレベルでは存在しない。したがって、老舗洋品店の販売方針に基づいて言えば、誰かの＜レーダーホーゼン＞が示しているのは特殊性ではなく、単独性と言ったほうがふさわしい。単独性と特殊性の区別について、柄谷行人氏は次のように論じたことがある。

単独性は、特殊性が一般性からみられる個性性であるのに対して、もはや一般性に所属しようのない個性性である。たとえば、「私がある」(1)と、「この私がある」(2)とは違う。

(1)の「私」は一般的な私のひとつ(特殊)であり、したがって、どの私にも妥当するのに対して、(2)の「私」は単独性であり、他の私と取り替えできない。⁹

柄谷氏が言及した「私」と「この私」をもって考えれば、前述の＜カジュアル・パンツ＞は「私」に相当し、＜レーダーホーゼン＞は「この私」に相当する。両者の決定的な区別は特殊性と単独性の違いにあると言っていいだろう。

＜レーダーホーゼン＞の単独性という観点から母親の言葉を分析すれば、その使い分けの動機を以下のように解釈できる。＜レーダーホーゼン＞の単独性を知らない母親は、老舗洋品店に赴く途中(1と2)および店に入ってから(3)、終始＜レーダーホーゼン＞という単語を使っていた。この場合、母親は＜レーダーホーゼン＞という言葉は＜カジュアル・パンツ＞と同様のカテゴリーに属する集合的なものだと考えているようである。しかし、店の老人が店の方針を説明し、履く本人(父親)が来ていなければ買えないとわかった母親は、購入することが不可能だ

⁹柄谷行人(1989)『探求2』講談社 10頁

と気付いた。単独性の原理から言えば、母親はこの時点で店を去るべきだったのだが、彼女（母親のこと）は買うことを諦めず、〈レーダーホーゼン〉という呼称を〈ズボン〉¹⁰に変える（4）。ここで注目したいのは、〈半ズボン〉ではなく、〈ズボン〉という単語の使用である。〈ズボン〉と〈半ズボン〉という表現の違いに着目すると、〈半ズボン〉という言葉に巧妙に隠された真意が伝わってくる。

語彙から言えば、〈ズボン〉は〈半ズボン〉より上位の集合であるが、どちらも概念であるため、母親が区別なく使用したとしても問題ない。つまり、4における〈ズボン〉は〈半ズボン〉に置き換えられても差し支えない。しかし、単独性の観点から考えれば、もし4における〈ズボン〉を〈半ズボン〉という単語に置き換えれば、次の5で使用される〈半ズボン〉という言葉は別の言い方に変える必要がある。つまり、単独性を帯びた〈レーダーホーゼン〉を夫のために強引に買おうとしている母親は〈レーダーホーゼン〉の集合を表す言葉が必要となったのだ。そうすると、〈ズボン〉か〈半ズボン〉のいずれも使用が可能だが、その後、負けずに交渉する母親は新たな提案をし、その後、父親の〈レーダーホーゼン〉ではない具体的な一着が登場した（5）。父親が現場にいないため、当然それは“父親の〈レーダーホーゼン〉”とは言えない。だが、この場合、集合ではなく、具体的な一着を表す言い方が必要となり、〈ズボン〉か〈半ズボン〉の選択に迫られる。要するに、〈ズボン〉と〈半ズボン〉は母親の言葉において、それぞれ集合としての〈レーダーホーゼン〉と強引に買おうとする具体的な一着の〈レーダーホーゼン〉を指しており、別の需要に応じた異なった表現である。従って、もし4における〈ズボン〉が

〈半ズボン〉に置き換えられてしまうと、混乱を招きかねない。勿論、混乱を避けるため、前述のように5における〈半ズボン〉を別の表現に変えればよいのだが、〈ズボン〉と〈半ズボン〉のような似た表現によってもたらされた効果は到底、得られないだろう。したがって、このように〈ズボン〉と〈半ズボン〉という表現の違いに着目すると、本作における〈半ズボン〉という言葉にこめられた真意が理解される。つまり〈半ズボン〉という言葉は、冒頭部における「彼女」（娘）の説明以外は、母親が強引に買おうとする具体的な一着の〈レーダーホーゼン〉を指しているのであり、駒ヶ嶺氏が言うところの「概念」ではないのである。

〈レーダーホーゼン〉の単独性から4と5における〈ズボン〉と〈半ズボン〉の違いについて分析したが、次の6には〈レーダーホーゼン〉という単語が再び登場している。「あなた方はその人にレーダーホーゼンを売り、私がその人からそれを買う」という6の前半部において使用された〈レーダーホーゼン〉は、父親と同じような体型のドイツ人に売ったものを指しており、当然〈レーダーホーゼン〉と言える。ただし、それはそのドイツ人の〈レーダーホーゼン〉であって、父親の〈レーダーホーゼン〉ではないことに注意したい。そして「だからもし今レーダーホーゼンを買う機会がなければ、私は永遠にそれを手に入れることはできないのよ」（261頁）という後半部の〈レーダーホーゼン〉は、明らかな「誤用」¹¹で、母親の強引さを窺わせるもので

¹⁰ 母親の言葉に現れた〈ズボン〉に〈>付けて一般的な意味におけるズボンと区別する。

¹¹ 後述したように、新たに提案した母親は、単独性を若干理解できたが、慣習的に特殊性で単独性を扱う行

ある。

<レーダーホーゼン>と<半ズボン>の性質は以上の考察を通じて明らかになったと思われる。まとめてみれば、両者は特殊性と一般性の関係にはなく、<レーダーホーゼン>という単語が示すのはその単独性である。単独性を帯びるがゆえに、父親とそっくりなドイツ人から<レーダーホーゼン>を買っても、それはそのドイツ人の<レーダーホーゼン>で、父親の<レーダーホーゼン>ではありえない。従って、もしそれが父親へのお土産であれば、当然<レーダーホーゼン>とは言えず、<半ズボン>としか言えないのである。だから母親は「彼女」に離婚原因を説明するときに<レーダーホーゼン>ではなく、<半ズボン>という言葉を使ったのだろう。

4 母親の離婚と混乱

<レーダーホーゼン>の単独性を踏まえ、小説の主要内容である母親の離婚を考察したい。

母親が離婚を決意したのは、<レーダーホーゼン（半ズボン）>を買った後のことである。娘である「彼女」の言葉を借りれば、「三十分ほどでその作業（採寸の作業を指す——筆者）が終わったとき、母は父親と離婚することを決心していた」（262 頁）ということになる。三十分間の採寸と母親の離婚の決意との間に直接的な因果関係が示されていないため、多くの研究者は<レーダーホーゼン（半ズボン）>の象徴性を分析したのだろう。一方、小説における「僕」も母親の決意が理解できず、三十分間の出来事を再三にわたって娘である「彼女」に尋ねた。しかし、「彼女は「何も起こらなかったわ」（262 頁）と答えただけでなく、「母親自身にもずっとわからなかったの。それで母もひどく混乱していた」（262 頁）と付け加える。母親の混乱は「彼女」の推測ではなく、離婚から三年を経て娘に会った際の母親自身が「私自身にさえものごとの進み具合がよく把握できないでいたのよ」（257 頁）と告白したものである。

内容から言えば、母親の離婚の決意は採寸する間に湧いてきた夫への憎みと深く関わっている。つまり、母親が離婚を決意したのは、父親に対する嫌悪感に由来したものである。だが、母親の気持ちの描写として、娘が口にした「母は自分がどれほど激しく夫を憎んでいるかということをはじめて知った」（263 頁）という表現における「はじめて知った」という箇所は看過できない。この表現から考えれば、父親への嫌悪はずっと以前から母親の心に隠されていたはずである。しかし、ずっと自覚していなかった嫌悪が採寸とともに「明確になり固まってい」（263 頁）って、結局採寸が終わったときに離婚を決めたのである。知らない状態から「はじめて知った」という変化が採寸によって起きるのは不可解で、母親の混乱を招いた原因と言えよう。母親は帰国後、離婚を主張し、二度と家に戻らなかったが、自分がなぜたったの三十分間で夫への憎みを認識し、離婚まで至ったのかは理解できなかっただろう。

母親の離婚と混乱はともに<レーダーホーゼン>の単独性の観点から解釈できる。一言で言えば、彼女が単独性を特殊性として扱ったことと関わっている。ここで<レーダーホーゼン>の単

動をとる。したがって、これは理解しないままの誤用ではなく、意識的に誤用していると言っていいたいだろう。

独性という視点から、〈レーダーホーゼン（半ズボン）〉を買う母親、および母親と父親との関係について、四段階に分けて考察したい。

第一段階は〈レーダーホーゼン〉の単独性を完全に意識していなかった段階である。この段階における母親は、前述した〈カジュアル・パンツ〉のようなものとして〈レーダーホーゼン〉を捉えている。〈カジュアル・パンツ〉は集合であって、単独性を帯びていない。たとえ一着の

〈カジュアル・パンツ〉を取り出したとしても、それがいかなるサイズに細分化されていようと、単独性をもっていない。つまり、〈カジュアル・パンツ〉は集合であろうと、一着であろうと特殊性の範疇に入る。一方、洋品店の〈レーダーホーゼン〉は集合に属しておらず、誰かの

〈レーダーホーゼン〉として存在するため、唯一無二なものとして単独性を帯びている。しかし、母親はそれを意識せず、父親に〈レーダーホーゼン〉のお土産を頼まれた時に快諾し、老舗の洋品店に赴くときや、店に入ってから最終〈レーダーホーゼン〉という言葉を使った。いうまでもなくこの段階における母親は単独性を特殊性に置き換えている。一方、父親との関係で言えば、母親は夫を唯一無二の一人の男性ではなく、〈父〉という集合の一人として彼と婚姻関係を保っている。

作品を読めばわかるように、母親のドイツ旅行はもともと父親と二人で行く予定だったが、「父親は仕事の関係でどうしても休みがとれな」（255 頁）だったので、母親の一人旅になったのである。夫婦で一緒に旅行ができるのは仲が良い証であり、また娘である「彼女」によると、当時の二人は「そのまま仲良くやっていけそうに見えた」（255 頁）のだという。だが、この良好な関係は果たして唯一無二の一人の男性への感情を基に築かれているのだろうか。作品を読む限り、父親に対する母親の感情の表現は、採寸する時に感じた憎しみ以外は皆無と言って良い。母親が大事にしていたのは家庭であり、父親を唯一無二の一人の男性というより父親の役割を果たす家庭の一員と見なしていたようである。要するに、父親と仲良い関係を保った母親からすれば、父親は〈父〉と呼ばれる集合の一人にすぎなかったのだ。

次に、混乱に陥る第二段階である。この段階における母親の混乱は老人との対話によってもたらされたもので、彼女がはじめて単独性に遭遇した時の反応と言えよう。老舗の洋品店の方針が示すように、〈レーダーホーゼン〉は単独性を帯びたものであり、これが老人が「存在しないお客様には品物を売ることはできん」（259 頁）と言った所以である。つまり、老人は父親を唯一無二の個体として見なす必要があるのだが、父親が現場にいない以上、当然その個体の単独性を把握できないことになる。換言すれば、「存在しないお客様には品物を売ることはできん」という言葉の背後に、〈レーダーホーゼン〉を売る前提だけでなく、〈レーダーホーゼン〉の単独性を強調する意図が隠されているわけである。一方、母親は〈レーダーホーゼン〉という単語を、〈カジュアル・パンツ〉と同種のものと思っており、サイズが合えば、本人の出番は必要ないと思込んでいるようである。単独性を意識していない、あるいは今まで単独性を特殊性と誤認してきた母親は、老人の言った「存在」という言葉を生きているという意味として理解し、たとえば老人が説明を続けても、なぜ売ってくれないかが飲み込めず、混乱に陥る。これを父親との関

係で言えば、第二段階における母親に、夫がはじめて<父>という集合の一人ではなく、単独性のある唯一無二の男性像として浮かび上がったということであろう。しかし、単独性に直面した母親はそれが理解できず、当然、混乱に陥ることとなる。これはまさにはじめて単独性にぶつかった時の人間の反応と言えよう。

第三段階は、母親の問題解決である。店の方針が説明された後、夫が現場にいなければ<レーダーホーゼン>が買えないという説明に納得できなくとも、母親は<レーダーホーゼン>が入手できない事実を認めた。前述したように、単独性という観点からすれば、この時点において父親の<レーダーホーゼン>を購入することは不可能であり、母親は店を去るべきだった。しかし、母親は新たな提案をする。「私が主人にそっくりの体型の人をみつけてここに連れてくるの。そしてその人に半ズボンをはいてもらい、あなた方がそれを調整し、私に売るの」(260 頁)。いうまでもなくこの解決策は、<レーダーホーゼン>の単独性を特殊性として扱う典型的な行動と言えるが、母親の言動を考察すれば、以下のように解釈できる。まず新たな提案をする前に、母親は<レーダーホーゼン>ではなく、<ズボン>という言葉を使い、そしてその提案においては、<半ズボン>という言葉を使うようになった。<ズボン>と<半ズボン>の違いおよびそれぞれの意味については前述したが、<レーダーホーゼン>ではない両者の呼称を使用したことは母親が単独性を意識し始めたことを窺わせる。また、新たな提案の前に、「彼女はため息をついて、しばらく戸口に立っていた。そしてどこかに突破口がないものかと頭を働かせた」(260 頁)という描写がある。勿論、「突破口」は特殊性で単独性の問題を解決することであるが、単独性への意識が今までの思考の慣習になかった母親の姿がここに巧妙に描かれていると言えよう。要するに、問題解決の段階における母親はたとえ頭で単独性を意識し始めていても、実際の行動では依然として今までの行動様式で物事に対応したのである。

一方、父親との関係で言えば、しつこく<レーダーホーゼン>を買い求めた母親はこの段階においては、たとえ父親の単独性のある程度意識し始めていても、彼のことを依然として<父>という集合の一人として扱っている。というのは、「主人にそっくりの体型の人をみつけてここに連れてくる」ことは、父親を代替可能の存在として捉え、単独性を特殊性に置き換えることに他ならないからである。単独性が特殊性に置き換えられ、父親の単独性が引き続き抹殺されていた以上、母親の脳裏に離婚などといった考えは毛頭浮かばなかつただろう。

最後は第四段階で、母親が離婚を決意した段階である。第一から第三段階を振り返ればわかるように、しつこく<レーダーホーゼン>を買おうとする母親は、いかにお土産を入手するかを考えていただけのようである。だが、店の老人がドイツ人男性に<レーダーホーゼン>を履かせ、「いろんなところをのぼしたり縮めたり」(262 頁)する三十分間に、事態は変わった。<レーダーホーゼン>の単独性から言えば、採寸する三十分間は、誰かの<レーダーホーゼン>を誕生させる時間であり、<レーダーホーゼン>の単独性を具現化させる時間とも言える。したがって、採寸を見る母親は単独性の存在を頭で理解したのではなく、実際に目の前で見せられたのである。それでは、この段階以降、父親との関係はどうなっていくのだろうか。

二人の娘である「彼女」の語りからわかるように、父親は「女関係では比較的だらしない人」(255 頁)である。しかし、「基本的には彼女の母親は我慢づよく……——ある場合には想像力がいささか不足しているのではないかと思えるくらいに我慢づよく——家庭を大事に」(256 頁)した。母親の我慢強さは、唯一無二の一人の男性のためではなく、家族のためだったのだろう。つまり、いくら「女関係では比較的だらしない人」であっても、父親はおそらく<父>の役割をきちんと果たしていたのだろう。そうだとすれば、家庭を重要視する母親は当然、我慢することができ、父親とも婚姻関係が保てることになる。だが、単独性を具現化させた三十分間において、いままで<父>という集合に属していた父親像が倒壊し、母親ははじめて理念的ではなく、実際的に一人の男性の存在を感じはじめたのだ。

「その人は……そしてその人が新しいレーダーホーゼンをはいていかにも楽しそうに体をゆすって笑っていたの。母はその人の姿を見ているうちに……」(262-263 頁、下線筆者)採寸を眺めている母親を描写する際に使用される3度の「その人」という表現に注目したい。これは柄谷行人氏が指摘した「この私」を想起させる。母親はそれによってはじめて「自分がどれほど激しく夫を憎んでいるか」(263 頁)がわかり、採寸が終わった時に離婚を決意した。言い換えれば、採寸によって露呈した単独性は唯一無二の一人の男との関係を浮き彫りにしたのである。この一対一の関係は、おそらく到底、我慢できないほどの男女関係だったのだろう。勿論、母親と父親との関係は終始一対一の男女関係であったのだが、そのことに母親は採寸するまで気がつかなかったのだと思われる。つまり、父親の単独性は常に存在していたのだが、母親はただそれを意識していなかったのである。これは母親の我慢強さに由来しているのだろうが、作品ではそれを「想像力がいささか不足している」(256 頁)と帰結している。いわゆる想像力の不足は単独性への認識の欠如とも言えよう。

夫を<父>という集合の一人ではなく、唯一無二の一人の男へと捉え直すことは、単独性への目覚めであると言えるが、離婚を決意した母親は依然として「ものごとの進み具合がよく把握できないでいた」(257 頁)という。これはおそらく単独性がいかなるものだったのかをうまく把握できないことに由来しているのだろう。つまり、母親は<レーダーホーゼン>に対しても、父親に対しても終始、その単独性を特殊性として扱っていた。そのため、彼女は父親の<レーダーホーゼン>を<半ズボン>という言葉を使用してしつこく買おうとした。それがうまくいけば、父親とは「比較的親密」(255 頁)な関係が保てたはずだ。しかし、採寸の三十分間において具現化した<レーダーホーゼン>の単独性に遭遇し、彼女ははじめて実際に単独性の存在を感じたのだろう。そこで母親は今までの特殊性という観点から脱出しようとし、単独性で物事の把握を試みたようであるが、これは至難な作業で、それをうまく把握できなかったとしても当然であろう。というのは、老人の説明を受けた時の混乱からもわかるように、単独性という概念は母親にとって新奇なもので、それは理解不能と言ってよいほどである。たとえ頭である程度理解できたとしても、実際にそれで物事を扱うのは困難であろう。「私自身にさえものごとの進み具合がよく把握できないでいた」(257 頁)という母親の告白は新たな認識システムが樹立されるまでの

空白を意味していると考えられる。

以上、<レーダーホーゼン（半ズボン）>を買う母親の行動を分析し、父親との関係と合わせて考察した。終始、特殊性で単独性を扱う母親は、第四段階においてはじめて具現化した単独性を意識し、父親と離婚することを決めたのだが、物事をずっとうまく把握できないままだった。この状況は単独性への目覚めの大切さと難しさを語っていると言えよう。

5 終わりに

「レーダーホーゼン」は多くの研究者に母親の離婚話として読まれており、<レーダーホーゼン>の象徴性の観点から研究されてきた。勿論、離婚はこの物語における一大要素であるが、

<レーダーホーゼン>の単独性こそが解読のキーポイントであった。つまりドイツの老舗洋品店において、母親は単独性に遭遇し、今までの特殊性の枠組みから脱出しようと試みたが、結局、この単独性への目覚めは完全なものではなく、母親はずっとそれを明確に把握できずにいたのだ。

短編「レーダーホーゼン」は単独性の大切さと難しさを表現しているが、実は村上春樹文学において、単独性に焦点が当てられているのは本作だけではない。『羊をめぐる冒険』には命名をめぐる「僕」と運転手の対話があり、『ねじまき鳥クロニクル』は単独性の象徴とも言える人の名前を探す物語である。また『猫を棄てる』の最後には「一滴の雨水には、一滴の雨水なりの思いがある」¹²という表現もあり、これらは村上春樹が長年にわたって単独性に着目してきた証であろう。短編「レーダーホーゼン」は単独性をめぐる一連の作品の系譜にあり、ユニークな一編と言えよう。

テキスト

村上春樹（1991）『村上春樹全作品 1979～1989 ⑤短編集Ⅱ』講談社

参考文献

加藤典洋（2011）『村上春樹の短編を英語で読む 1979～2011』講談社

柄谷行人（1989）『探求 2』講談社

関氷氷、楊炳菁（2020）「「レーダーホーゼン」における「絶対的眞実のようなもの」」『淡江外語論叢』第 34 号 153-169 頁

関氷氷、楊炳菁（2023）「リアリズムの破壊と蘇生の試み——「レーダーホーゼン」と「タクシーに乗った男」における村上春樹の「ツイスト」——」『早稲田大学国際文学館ジャーナル』第 1 号 13-22 頁

駒ヶ嶺泰暁（2008）「「レーダーホーゼン」論——「レーダーホーゼン」が「半ズボン」になったことが、「僕」によって語られる物語」宇佐美毅、千田洋幸編『村上春樹と一九八〇年代』おう

¹² 村上春樹（2020）『猫を棄てる 父について語るとき』文藝春秋 96 頁

ふう 200-215 頁

酒井英行 (2001) 『村上春樹 分身との戯れ』 翰林書房

村上春樹 (2020) 『猫を棄てる 父について語るとき』 文藝春秋

【関氷氷 (日本近現代文学)、楊炳菁 (日本近現代文学)】